

伊藤博文と英米欧体験～大政治家誕生の秘密

2012年3月 泉 三郎

1 見直されるべき伊藤博文の評価

伊藤は、まさに近代日本のフロントランナーだった。幕末に於いて既に、英国へ密航し、英仏米蘭との戦争の和平工作に挺身し、テロリストとしても、革命的挙兵においても、先頭を走った。明治国家になってからも、岩倉使節団の先導役として参加し、サンフランシスコの公式の場で初の英語のスピーチをし、明治六年の政変では大逆転劇を舞台裏で支え、内閣制度をつくっては初の総理大臣となり、非西洋世界における初の近代的な憲法を制定し、議会制政党政治で党首となり、さらには植民地国家韓国の統監にもなった。こうして休む間もなく、常に時代の先端を走り続けた。

そして明治四十二年十月（一九〇九）、満州において安重根によって暗殺された。その葬儀は十一月四日、日比谷公園において厳粛盛大に執り行われ、国民は各戸に反旗を掲げて弔意を表した。そして多くの有力者が、伊藤の人となりを追慕し、その業績を挙げて弔辞とした。

「伊藤は実に立派な政治家であった。伊藤の人物は此の一言で尽きる。殊に我が輩が伊藤に敬服しているのは、その頭脳が多方面であったこと、その性格が調和的であったことだ。」

青年時代とくに親しく共に国事に奔走し、終生政治家として交際のあった大隈重信は、いった。

「元来政治家には頭脳が多方面であるということが非常に必要である。政治ということは国家を形造る各種の勢力を色々の方面から視察して時と場所に応じて料理按配していくことで、軍事とか、外交とか、財政とか、あるいは教育、宗教、民情、風俗とか、よく之を比較考量して政治を行わねばならぬ。従って政治家にはその頭脳が多方面に発達して之を洞察する力がなくてはならぬ。

それから伊藤の性格が極めて調和的であったことは、多数の政治家に稀にみられる美点であった。政治には両方面の衝突が必然伴ってくる。わが国の政治が比較的円満に淀みなく発達を遂げてきたのは、実にこの伊藤の調和的な性格に俟つところが多かった」

土佐出身の軍人政治家であり、第一次伊藤内閣の農商務相も務めた谷干城は、伊藤が反対派の意見もよく聞いたとし、とくに憲法政治の業績について次のように言っている。

「独りわが伊藤公は帝国憲法を起草したるのみならず、またこれが実施に際して自らまず貴族院議長となって憲政運用の衝に当たった。決して大隈、板垣伯の如く議院を軽視するような不都合はなかった。要するに、わが憲政の今日あるは伊藤公の賜である」

また、日露戦争についても

「伊藤公にして在らざりせば、結末はどうなったかわからぬのである。伊藤公ありしが為ともかくもあれだけの効果を収むるを得たのである。戦争の如きは軍人でさえあればできる。かつ老将がなくなっても有為の後継者はあえて乏しくない。しかし一国の国政を裁断して大過なきを得る才能、手腕のある政治家はめったに得られるものではない」

谷の指摘は政党政治を主唱した大隈、板垣が国会に議席を持つようとしなかった矛盾をつき、日露戦争に際しては開戦時から終戦工作に手をつけた深謀遠慮を評価しているのだ。

宮内庁御用の侍医で多くの要人に接したドイツ人の医師のエルウィン・ベルツは、次のようにいう。

「公は性急でもなく將た柔弱でもなく、举止温和にして何時も面上に友誼的微笑を浮ぶるを常とせり。その不変の態度は内政外交ともに穩健の二字に尽きぬべし。

公は私交行上において、気取らざる快活なる好伴侶なり。公は酒と女と煙草とを好み。しかもこれを秘せんとせず、常にいわく”君らはわれより何を期待せんとする者ぞ。終日国務に**し、頭がグラグラする時、晩酌を傾くるに、制服着用の給侍より、無邪気にして綺麗なる芸妓の手の方がなんぼ慰めになるか知れぬ”と。

全三巻三千ページを超える大部な「伊藤博文傳」を編集した小松緑（長く秘書官でもあった）は、その巻末に伊藤の特筆すべき特長として三つのことを挙げている。

第一は、衷心より天皇を尊信していたこと、そして天皇からも最も深い信任を寄せられていたこと。

第二は、天真爛漫たる資稟のこと。喜怒哀樂の情を抑ふることなく、憤るときは鬼神も避ける威風あり、笑うときは稚児も親しむ温容あり、悲しむときは涙を流し声を放つに至る。しかも恬淡として物に擬滞せず、時過ぐれば、さながら光風*月の如く、豪も平常に異なる所がなかった。

第三は、漢洋両学に精通し、博覧強記にして文字の末といえども苟もせざりしこと。漢学の造詣に深いのみならず、英学の素養も尋常ならず、自ら戯れに”予は大臣を罷めても、なお英語教師として飯がくえるぞ”といわれしことあり。なお、文才に長じ、詩藻に富み、また書道においても優に一家をなすの妙域に達していた。

しかし、現代における伊藤の評価は意外にも低い。戦前は太閤秀吉に比較され大いにもてはやされたが、戦後はすっかり影がうすくなってしまった。何故かといえば、敗戦のショックで、天皇国家をつくり軍独裁の道を開き、朝鮮侵略のシンボルになった伊藤を悪役に見立てて、反動的権力政治家のレッテルを貼り付けてしまったからである。さらにまた、個人的な評価でも、軽佻浮薄、要領才子、弱腰軟弱、理念なき政治家、好色漢のひひ爺などと、追い打ちをかけられた。

しかし、没後百年の最近になってようやく再評価がなされてきた。二〇〇九年には伊藤

之雄氏の六百ページに及ぶ伝記「伊藤博文」（講談社）が刊行され、二〇一〇年には若き学究の瀧井一博氏の「伊藤博文」（中公新書）が出版された。伊藤之雄氏は博文の特性をこれまでのイメージを覆す「剛凌強直」という言葉で表現し、瀧井氏は、伊藤が理念を持った「知の政治家」であったことを明らかにした。

また、少し遡るが、勝れた史伝「伊藤博文」（上下）を書いた三好徹氏は、伊藤の特徴について、よくいわれる「周旋の才」の他に、「土性骨にあり」として、その証拠に、英国から和平工作のために決死の覚悟で帰国する時、功山寺の高杉拳兵に賭けた時、明治六年の政変劇での舞台廻しの時を挙げている。そして、多くの歴史家が伊藤を柔弱であると評しているのは誤りだとし、伊藤の本質は粘り強く妥協策を探るけれど、最後は闘う覚悟をしっかりもっていたと書いている。

そして最後に付け加えて置きたいことは、瀧井一博氏が指摘している次の点である。伊藤は明治憲法についても一歩先をみていて、その修正を視野に置いていた。とくに危機感をもったのは軍部の暴走であり、それを食い止める仕掛けを作ることを画策した。朝鮮国の統監になった背景にも外から枠をはめて軍の突出を防ぎ憲法の悪用を防ごうとした形跡がある。そして伊藤は「文明政治」という理想をもっていた。それは韓国に対しても清国に対してもそうであった。その意味で一歩先だけでなく、長期的な広い展望も持っていたとしていることである。

伊藤の生涯はまさに政治家そのものであり、政治家とはかくなるものかという格好な見本をここに見ることが出来る。伊藤は、現実の厳しさを知りながら、粘り強く決して絶望せず、常に前向きであり楽天的であった。その視野はすでに国内だけでなく世界に及んでおり、その意味で、伊藤は近代日本が生んだ偉大な政治家であった。そのことはもっともっと見直されるべきだと思う。

2 米国へ金融財政制度の調査行

* 自ら建言して米国へ

明治国家は、大政奉還、版籍奉還、藩知事の任命と着々、統一国家への歩みが進む中で、次のステップはいよいよ「廃藩置県」の大改革であった。財政と兵制の双方を一本化する必要があり、「廃藩置県」は避けて通れない課題だった。しかし、それには大きな反対が予想されたのでなかなか踏み切れなかった。

当時、日本は旧幕府や諸藩の発行した紙幣が混在し、外国貿易上の障害にもなり、物価の上昇をもたらして民の生活にも悪影響を与えていた。伊藤は、それを見据えて貨幣の統一、財政の一本化をはかる必要を痛感し、英米の書物を通じ調査をすすめていたが隔靴搔痒の憾があり、是非とも先進国の制度と運用の実際を見たいと考えた。

伊藤はロンドン留学以来、英国との縁が深くパークスやサトーとも親しくなっていたので英国へ行く道もあったはずだが、視察先には米国を選んだ。何故かといえば、英国が貴

族の国で万事保守的なのに比べ、米国が若い国ですべて開明的なところに大きな魅力を感じたのだ。また、経済的に英国ほど進んで居らず、近々南北戦争もあってその後始末の経験があり、いわば中進国である米国の方が日本が手本にするには適当と解釈したものと考えられる。それに伊藤にしてみれば、身分制度のない自由で実力本位のアメリカは憧れの対象でもあったに違いなく、ジョセフ・ヒコからの情報もあって是非米国社会をみてみたいという思いが強かったものと推察される。

そこで、明治三年十月二十八日、「日本の制度確立のためにアメリカの財務会計について調査したい」との願書を太政官に提出した。それは即認められ早速随員の選考に入った。まず幕末すでに欧州に出かけた経験があり英・仏語を解する福地源一郎、次いで英語に堪能な芳川賢吉を指名、さらに吉田、木梨の二名を加えた。また、実務を学ぶ必要があるとして江戸、横浜、大坂から為替や陸海運に携わる町人を選んで随行させることにした。このあたり、実務家の伊藤らしい配慮である。こうして十一月二日、二十一名の一隊がアメリカへ向けて出帆することになる。

* 「奉使米国日記」

この調査団については、福地が「奉使米国日記」を残しているのので、それによって概略を紹介したい。

一行の構成はこうである。理事官 大蔵少輔伊藤博文、随員、大蔵省御用掛 福地源一郎（当時フランス塾主宰）、同 芳川賢吉（当時鹿児島藩の英語教師）、同 吉田二郎（武蔵の豪農の出、五代友厚の推薦）、木梨平之進（長州の出、木戸の推薦）、そして東京、横浜、大阪の為替会社、廻漕会社のもの十二名、他に従者数名である。

十一月二日（旧暦）、十二時、アメリカンパシフィックメイル会社の定期船「アメリカ号」で横浜を出帆し、同月二十七日、七時、サンフランシスコに着く。福地は「この行、横浜を離れし以来、毎日逆風、天気陰鬱、晴日を見ず」と記し、サンフランシスコでは「ガランドホテルに止宿す」とある。

ワシントンでは、ホワイトハウスに近いアーリントンホテルに宿をとった。米国政府は伊藤らのために、兵庫に来ていたスチュワード大尉を接待役に命じていてくれた。そのお陰もあって極めて段取りよく事が運び、十二日には早くもグラント大統領の謁見に臨む。まず国務長官のハミルトン・フィッシュに面会し、その案内でホワイトハウスに参上する。大統領は副大統領のゴルフアックスほか各大臣列座の中で引見した。伊藤としては晴れがましい舞台であり、その得意や思うべしである。それより海陸の総督の私宅にも招かれており、ワシントンの厚遇ぶりは破格といってよい。当時の米国は鎖国日本の扉を開いたのは米国であるという自負もあり、政治経済両面で英国と張り合っていたこともあって、日本との関係を重視したものと思われる。

翌日の十三日には大蔵省を見学、大臣ボウルエルに面会し、今回の調査団の目的と学びたいことの概要を述べた。宰相（大臣のことか）は書記官長サヴィル氏を指名して案内す

るようにいった。このサヴィル氏は以後、調査団のためにいろいろの便宜をはかり、協力してくれることになる。さらには 金融関係の商人も紹介され、同行してきた町人たちを実務の勉強のためニューヨークに派遣する相談をした。十四日には、スチュワートの案内で議会の見学にいき、議長にも面会し、夜は八時半から大統領によるレセプションに出ている。

それから、サヴィル氏の手配により、関係各所、各担当者に会い、また理財会計の書を四十四冊も贈られる。こうして調査の準備が整ったのであろう、二十日にはホテルから借家へ移動する。伊藤、福地、芳川、吉田、木梨の五人で、家賃は三ヶ月分をわたしたとある。二十一日より「一同翻訳の業につく」とあるから、関係書類を渉猟し重要事項の翻訳にかかったものと思われる。

その間、伊藤らは関係部署を訪れて担当官に会い、質問し、調査に務める。二十三日にはフィラデルフィアに出かける。二十四日には、ナショナルバンクを訪れ、頭取のミッチェル氏に会う。この人はサビル氏の叔父にあたり、とくに親切に対応してくれた。そして造幣局、地金請取所、各国金銀見本を蔵する所、検金所、鑄金所、彫型所などの他、所蔵十五万冊というフィラデルフィア図書館も見学している。それから郊外にあるミッチェル氏の私宅に招かれ、ここに宿泊させてもらっている。

十二月二十九日の日記には「貨幣論を東京へ送る。御用状中に封入せり」とあるから、調査第一報を郵便で送ったのだろう。こうして調査翻訳の仕事は、気のあった有能な仲間同志のことであり快調に進んだ。報告書の宛先は、岩倉大納言、伊達大蔵卿、大隈参議、江藤中辨 渋澤大蔵少丞であり、伊藤はそこで次のように書いている。

「僕のご承知の通り短才不学に候得ども、幸いに書記官三名は是まで英学に長じ、俊秀鋭敏之人物にて頗るこのことに勉強いたし候につき、唯今の状況をもって拙考仕れば、三四ヶ月の間に十分の志願を達し、帰朝の上はきっと御国益と相成り申すべきと存じ候」。そして、このあと、金銀貨幣の鑄造および新紙幣の発行法について詳細なレポートがつづくのである。

* 精力的な調査活動

伊藤らはその後も精力的に調査を続け、その関心領域は政治・経済全体のシステム、憲法や行政組織にまで及んでいる。とくに大蔵省の職制、その位置づけに関するものについては注力した様子で、それは帰国後大蔵省に提出した改革案に現れている。いわく「大蔵省は全国の財政を治め、官庁の経費を支出し、内外の税法を改革し、金銀貨幣の品位を定め、公債を募集し、農業を勧め、商業を励まし、日本に独立した他に支配されない政体を確立するための、大きな財計をすべて監督する」。

また、金銀本位制の問題については、アジア地域が銀本位の経済であるにかかわらず、欧米学者の最新の説では金本位制をとるべきだとして、その採用を提案している。そして、吉田二郎を途中帰国させ、大蔵省の首脳に直接説得するよう仕向ける程の熱のいれようだ

った。また、民間の金融機関の重要性を認め、国法による銀行の設立についても、具体的な提案をしている。また、伊藤は共和国の仕組みに関心を持ち、合衆国憲法の制定に関する本も購入している。

こうして明治四年五月九日、伊藤一行は帰国する。滞在は一〇〇日ばかりの調査旅行だったが、きわめて密度の高い有用な出張だった。伊藤は帰国すると翌日、早速参内して報告をした。この旅行は、新しい国アメリカを知る上で大きな意味があり、各地で大いに歓迎されたことあって、伊藤にとって大きな自信となった。しかし、それは一面でアメリカかぶれの弊害も生み、自信過剰で慢心のマイナス面も内蔵させることになる。

* 条約改正問題で建言

伊藤は八月二十七日、大阪より帰京すると、今度は条約改正問題に関連し欧米に使節団を派遣すべしと建言する。伊藤には先を見る眼があり、次々と来るべき事態を想定して、現実的な手を打っていくところがある。廃藩置県が成功すれば、次の重要課題は条約改正であるとの読みだ。この件については、米国滞在中の二月二十八日すでに「明治五年には条約改正の期限がくるので、それを機に条約改正について使節団を派遣すべきだ」と建言している。宛名は大納言岩倉、参議大隈、外務卿**となっており、伊藤の狙いはとくに関税自主権の回復にあった。

「我が国のように十全の開化に至らない国は、防衛関税を用いないと文明の期を遅延する事あり、たとえば、書籍、器械のような必需品は税を軽くし、絹布、酒烟の如きは重くして 我が国の物産を起こさしめんためである。

英国の富強にいたるのも、始めこの法を以て、盛んに物産の製造を起こし、遂に他国より輸入の粗貨を製造して精貨となし、また之を他国に輸出しその利を得て国を富まし、今日の盛大に至る。今、英人の意にてもつばら自由貿易を主張し、之を我が国に誘導せんと謀る。これ彼が自利を謀るの術なれば、我が邦にありては大いに害あり。わが国にありてはすべからく米国の如く、防衛税を設けて我が国の物産を盛んにして、充実の後にいたりて英の例にならぬ自由貿易の説をたてるべし」との主張である。

使節団の構成についても具体的に次のように書く。

「俊秀の人物にて外邦の語に通じ、また我が国の事務を実地に心得候者を選び、之を西洋諸州ならびに米国に派出し、交際の状実、条約の取り決めの取り調べをなし、諸税目運上所の規則等取り調べをさせ・・・」とし、それも特命理事官とし各国政府へ公書を以て依頼すれば、私のこのたびの米国行きと同様、各国政府はその保護・便宜をはかってくれるものと思われるので、好都合であるとしている。

この米国からの建言は当事者を動かし、外務省に早速条約改正掛かりが設置された。もつとも条約改正の必要なことについては、それ以前より津田真道や神田孝平らによって議論されていたのだが、この時期大隈重信も提言しており、とにかく四月には外務当局から

二十三箇条よりなる新訂条約草本が提出されている。その際の意見は「国内諸制度未だ整備せざる今日、十分の改正は望み得ないので、改正期を三五年間延期し国歩の進運を待つべきだ」というものであった。大隈はかねてより懇意のフルベッキより同様の意見を聞き、具体的な使節派遣の企画書も出来ていた。が、大隈はなお時期尚早として秘蔵しておいたのだが、廃藩置県を機に時機到来ということで具体化に動いたのである。そこでは大隈自らその使節たらんと希望していた。

こうした背景があつてのこのたびの建議であり、三条は勅を奉じ、九月三日、使節派遣の事由書を外務卿の岩倉に示して意見を聞いた。これに対し岩倉は外務大輔寺島宗則と少輔山口尚芳とに諮り、改定期限は帰国後決めるとして、とにかく使節を派遣することにし速やかに人選をすべきことを答申した。

3 米国の旅、大失敗と怪我の功名

* ワシントン、とんぼ返りの大久保・伊藤

こうして岩倉具視を大使年、木戸孝允と大久保利通を副使とする大使節団が結成され、伊藤も海外事情に詳しいことが評価されて副使の一人に任命された。一行はサンフランシスコに上陸以来各地で大歓迎を受けながら、明治五年一月二十一日（1872. 2. 29）、小雪の降るワシントンへ着いた。早速アーリントンホテルに宿する。ワシントンは人口十一万人と少なく、まったくの政治都市で商業的な賑わいはなかった。当初のスケジュールによると、大使一行のワシントン滞在は、短いものだった。大統領のグラントを表敬訪問し、来るべき条約改正について延期を求める旨の挨拶をして、次の訪問地英国へ行くはずだった。そして四日目には大統領の謁見も行われ、六日目には国会議事堂への訪問も終わった。ところが三月十一日、国務省に長官のフィッシュを尋ねたことから事態は急転回する。

伊藤は既述のように前年にアメリカに来て大変な厚遇を受け百日ばかり調査活動をして実績を挙げている。その際、大統領や国務長官にも会っているので、その体験が大いなる自信につながっていた。一方、駐米代理公使ともいべき森有礼は弱冠二十五歳、着任まだ一年だったが、持ち前の積極性と率直な性格がアメリカ側に受けて、若き有能な外交官として名を上げていた。とくに国務長官のフィッシュには可愛いがられ、国際外交のてほども受けていた。フィッシュはグラント政権の最長老であり閣内一の力をもっていた。

この伊藤、森というとびきり元気のいい開化論者が合流したのだからいよいよ勢いを増した。大物の大副使が揃って来ているのだから、ただの挨拶だけで帰るのはもったいない。サンフランシスコ以来の熱烈な歓迎ぶりを見てもアメリカは極めて好意的である。条約改正についても交渉次第ではうまくいくかもしれない、と考えらようだ。

岩倉、木戸、大久保も二人がいうのなら「それもよかろう」ということになったのである。フィッシュに申し出ると「結構です、やりましょう」ということになった。

ところがフィッシュは「ついては、天皇からの委任状はお持ちでしょうな、それをひとつ拝見してから談判にはいりましょう」という。これには驚いた。そんな委任状などあるはずがない。「いやいや、われわれは天皇から委任された全権大使あるから、信用して談判を始めてもらいたい」といった。

しかし、フィッシュは頑としてうけつけない。アメリカ側はこの交渉で調印までもっていくことを目論んでいた。というのは、翌年に大統領選挙を控えているので、この際、他国とくに英国に先駆けて日本と条約を結び選挙に有利な得点をあげたかったのだ。そこで日本側はホテルに帰って鳩首相談をした。

「それじゃあ、委任状をとりやろうじゃないか」と。しかし、事は重大だ、書記官をやってとれるようなものではない。留守政府と「十二か条の約定」までしてきたのだから、それに反して本交渉を始めるといえば簡単に委任状が出るはずもない。これには相応の人物がいて説得しなければ無理だということで、大久保と伊藤の二人が帰国することに決するのである。

* 改正交渉の大失敗と怪我の功名

このため旅のスケジュールがすっかり狂ってしまった。使節本体だけがワシントンに残り、各省理事官と随員及び留学生はそれぞれの目的地に散っていく。

帰国した大久保、伊藤は、フィッシュへの面子もありとことん粘ってみたが埒は明かない。一説によると、ついには切腹するしかないとこまでいった。すると副島が「切腹でもなんでも勝手に召されい」と言い切ったという。が、そこまで来てやっと助け舟が出て、一応委任状は出す、しかしそれは使わないことを条件とすることになった。そして監視役に外務大輔の寺島宗側を随行させることになった。表向きは英国公使に寺島を任命して同行させるという名目である。

この間、ワシントンでは英国の代理公使アダムスやドイツの公使ブランツが相次いで使節を訪れ、最恵国待遇のあることを指摘し、一国との単独交渉する不利を訴えた。岩倉も木戸も外交のイロハも知らなかったことに衝撃をうける。また、この事態を心配した在ロンドンの留学生がワシントンに代表を送り、しきりに単独交渉の非を訴えた。木戸、岩倉は今回の条約改正交渉が完全な失敗であることに気づいた。

そこで二人がワシントンに戻るのを待って直ちに交渉打ち切りを決定し、国務省に願い出ると、フィッシュもあっさり了承した。まあ、世間知らずの子供をあやすような具合だったといえようか。

これはまさに大失敗だった。このため月日は延び、費用はかさみ、国内外の信用は失墜した。首脳陣もよほどこたえたはずである。それぞれの盟友への手紙にその心情が表れている。

岩倉は三条宛てにこ書く「百方後悔仕り候えども、今さら如何ともなす能わず、ただただ恐縮の外なし、さりながら半途にて辞し申すべき訳にも至り間敷く候こと、これよりは

鉄面皮にて各国使命を遂げ候心得なり」

しかし、この失態劇にも、怪我の功名といえる点もあった。第一に長居したお陰でいろいろのところを見学させてもらい大勉強が出来たことだ。第二は果敢に条約改正に踏み込んだので、国際関係や外交の実際や厳しい現実につき大勉強したことである。事実、そのために英国以降での外交交渉ははかかなり大人びてきている。つまり旅をしながら失敗をしながら、使節団の面々は成長していったということである。

しかも、伊藤についていえば、意外な利点があった。それは困難な使命を帯びての大久保との二人旅だった。伊藤はそれまで大久保とはそれほど接点はなかった。大蔵省問題ではむしろ保守的な大久保と敵対関係にあった。それが今回は四十日余の航海も含め、四ヶ月間も行を共にし、西洋文明についても国事についても互いに論じあったであろう。そしてこの失敗について大久保は恐らく伊藤を責めなかったのではないか、木戸は伊藤の軽佻浮薄を大いに責めたが、大久保はむしろ共にその責を担ってくれた。このことを通じて大久保への信頼が深まったであろうし、大久保も一見軽薄と見られがちな伊藤の本質を理解したに違いない。この旅を通じて二人の絆が深く結ばれたとすれば、伊藤の政治家人生にとって極めて大きなことであった。

4 英国・欧州の旅、大勉強で漸進主義へ

* 英国回覧、富国強兵のからくりを知る

さて、明治五年七月三日（1872. 8. 6）、一行はボストンから船出し、七月十四日、リバプール着、その日のうちに鉄道でロンドンに向かう。しかし、アメリカでとんだ長居をしてしまい大遅刻でやってきたので、英国の関係者はご機嫌斜めである。しかも夏休みに入っており、ヴィクトリア女王もスコットの離宮にいてしまった。そこで一行はそれを待つ間、賜暇で帰国していた駐日公使のパークスの案内で英国各地を視察することになる。

その結果、英国に百二十日も滞在することになり、ロンドン市内はむろんこと、南はポーツマスやブライトンから北はグラスゴー、エジンバラまでくまなく回覧することができた。そして日本とあまり変わらない島国がいかにして富強国家になりえたかの秘密を学ぶことができた。とくに大久保と伊藤の二人はアメリカではほとんど見学らしいことを出来ていなかったもので、英国のこの視察はきわめて重要だった。伊藤にとってもかつての書生時代の英国と違って、正式の使節として最大限の便宜を与えられ、これほど組織的に徹底して各産業の実態を見、貿易のからくりやインフラ設備、政治制度や万般を勉強できたことは幸いだった。大久保、伊藤というその後の日本丸の舵を握る二人にとってのこの英国での密度の高い視察旅行は極めて重要な意味をもつことになるのだ。

大久保は、親しい後輩の大山巖宛にこう書いている。

「どちらに参り候でも、地上に産する一物もなし。ただ、石炭と鉄とのみ。制作品はみな

他国より輸入し手これを他国に輸出するのいなり。製作場の盛んなることはかつて伝聞するところより一層にまさり、至るところ黒煙天に朝し、大小の製作所を設けざるなし」

そしてこの度の回歴は誠に面白く「英国の富強なる所以を知るに足れり」。

伊藤も、おそらく大久保と同様の感想をもったであろうし、「米欧回覧実記」における久米邦武の次のような記述は、それを代弁しているように思える。

「当今ヨーロッパの各国、みな文明を輝かし、富強を極め、貿易盛んに、工芸秀で、人民快美の生理（生活）に悦楽を極む」。しかし、よく観察すれば、それも「千八百年以後のことにて、著しくその景象を生ぜしは、四十年に過ぎざるなり」

試みに四十年前の欧州諸国を想像してみれば「陸に走る汽車もなく、海を*（速く走る）汽船もなく、電線の信を伝ふることもなく、小舟を運河に曳き、風帆を海上に操り、馬車を路に駆り、飛騎を駅に走らせ、兵は銅砲*（火縄）銃をとりて、数十歩の間を戦い、羅紗は富家の美服にて、綿布は海外の珍品なり」

日本と比べればその差が気の遠くなる程だが、歴史を見れば僅々四十年くらいの差でしかない。日本人は才が劣るのでなく能力が拙なるわけでもない。しっかり学んでいけば、その位の時間でこの文明には追いつけるという感触を掴んだということであろう。

*大いなる旅、グランドツアー

この旅は、欧州十カ国を二百日余を費やして回覧・比較し、マルセイユからの帰途では中東アジアの植民地ベルトを実見することになり、世界の情勢とそこでの日本の位置を知るのに極めて重要な視察となった。とくに伊藤にとっては、政治家として大成していく上での貴重な勉強期間になった。西洋文明をこれだけ広く深くみた政治家は、空前であり絶後だったとも思われる。大小様々な国、歴史の古い国・浅い国、共和制も君主制も相対的なものであり、それらを比較し文明が一朝にして進歩することのないことを知った。

そしてアメリカでの条約改正の失敗を通じて外交の現実について大いに学び、諸国の現実と歴史を見て書生的な急進改革論者から漸進的な大人の開化論者に成長していったといえよう。また、伊藤はこの旅を通じ、当初の急進的な開化派から、漸進的な開化派に変身していく。そして忘れてはならぬ大収穫は、岩倉・大久保という当代随一の政治家と昵懇になり、二人から学びかつその信頼を得たことである。このことはその後の伊藤の政治家としてのキャリアに極めて大きな影響を与えるのである。

5 明治六年の政変、懸命の画策、起死回生の大逆転劇

* 「征韓論」沸騰の只中、岩倉・伊藤帰国

九月十三日、岩倉と伊藤が帰国した。伊藤は岩倉に従って三条を訪れて帰朝の挨拶をし、その足で早速木戸のところを訪れた。木戸とは旅行中に顰蹙を買いご機嫌をそこねていたので、早急に修復する必要があった。が、伊藤は一夜語り合うことですっかり元へ戻った

感じをもった。木戸にしても伊藤ほど頼りになる便利のいい男はいないのであって、関係修復は望むところであった。木戸は伊藤に訴える・・・

「今や我が国は内治を優先すべきで韓国問題で戦端を開く怖れのあるようなことはすべきでない。しかし、それを訴えても当局者は聞く耳をもたず、いかんともし難い情勢にある。それに江藤一派の行動が許せない、これをどうにかしなくてはならない。しかし、自分はこのところ頗る健康を害して何もできない。むしろ辞職するほかはないと覚悟を決めたのだ」と。

伊藤は「このような重大な時機に辞職などとはとんでもない」と慰留につとめ、なんとしても国家のために尽力願いたいと懇願した。

そして井上馨と会って留守中の事をじっくりと聴き、現下の情勢を把握する。次いで二十四日には岩倉、大久保と会って善後策を熟議する。結果、ここは断然、内地優先の大議論を起こして西郷の韓国派遣を食い止めるべしとの意見に一致した。

しかし、大久保は参議になろうとはしなかった。岩倉はしきりに心配し、伊藤になんとか説得するように再三手紙を寄こす。伊藤は事態の打開を策して、あちこちかけずり回る。ここはどうしても大久保、木戸の内閣への出席が不可欠であり、加えて三条公と岩倉公の合力が必要であると強調し説得にこれ務める。

でも、大久保はウンといわない。それぞれに思惑があつて、この調整は困難を極めた。

伊藤は帰国後、木戸、井上らから情況を聞き、事態が深刻であることを痛感した。一番恐れ、憤慨したのは、戦争気分の征韓論であり、十二ヶ条の約束を反故にしての内閣の大改造であった。そしてその背後には江藤らの陰謀があり、薩長政権の主要人物を追放しようとする奸計にあった。伊藤は、木戸、大久保こそ新政権の要だと信じており、また個人的にも多大の恩義を感じている。ここは何が何でも征韓論を粉碎し、政権を奪い返さなくてはならないと思った。

伊藤は、岩倉、木戸、大久保の間を駆けづりまわり、鋭意事態の転換を策す。が、大久保は動かず、木戸は病気がちで、事態はちつとも進まない。さすがの伊藤も「陰雲冥想蒙の形勢」と悲観し、一時は絶望し涙するまでになった。しかし、そこで動いたのは岩倉だった。大久保を訪ねて「百万懇談に及び」、大久保から「今一応考えてみる」との返事を引き出す。そして大久保は、木戸の出席を条件にようやく参議になることを承知した。

*大久保政権誕生、伊藤参議工部卿へ

こうしてようやく正院（内閣）の会議が開催されるのだが、西郷と大久保が正面から対立し、三条も岩倉も為す術を知らなかった。こうして虚虚実実の駆け引きがあり、最後は米欧派遣組が勝利し、遣韓使節の件は白紙に戻った。西郷始め五人の参議は相次いで辞職し、信じがたい大逆転劇は終わった。

一日おいた二十五日、大久保は新内閣を組織する。電光石火の組閣ぶりである。すでにこの日のあることを期し、人選が進められていたのだ。大久保の周到目をみはるばかりで

ある。

新任参議は、工部卿に伊藤博文、外務卿に卿に寺島宗則、海軍卿に旧幕臣の大物勝海舟、司法卿には大木が横滑り、大蔵卿には大隈が留任とした。十一月になると内務省を新設し、大久保自らが内務卿になった。新参議はいずれも海外事情に明るく、世界における日本の相対的位置をよく心得たものを選んでいいる。また、勝海舟は西郷と親しく、また旧幕臣へのパイプにもなる一石二鳥の配材である。

伊藤は、この政変劇で、政治家として鍛えられ大きく成長した。明治創業時の業火をくぐり抜けてきた先輩たちから親しく薫陶を受け、政治家としての経綸としたたかさを身につけていったといっている。岩倉にしても、大久保にしても、木戸にしても、それぞれに立場があり、個性があり、意見の相違があった。その間にあって小異を捨て大同につくプロセスでの伊藤の働きは大きかった。吉田松陰が評した「周旋の才」はいかんとなく発揮され、大久保政権を樹立することで、新しい日本の近代化路線を定着させることになった。

大久保はこれから十一年五月に暗殺されるまでの四年半、大隈と伊藤という二頭の駿馬を御していく形になる。使節団派遣以前の久保は、保守的で先がみえていなかった。それがこの大なる旅を通じて文明開化のからくりを理解し、近代化への具体的な施策を見出した。殖産興業から富国強兵を目ざし国家の独立を確保する路線である。伊藤はその一翼を担い、弱冠三十二才で、晴れて国家の大臣となり、本格的な政治家の時代を開いていくことになるのだ。

6 明治国家をつくった男、「日本的文明政治」を目指す

* 伊藤はその後どのような道を歩んだのか。

大久保亡き後、伊藤は大隈より一歩先に出た。大久保の衣鉢を継いで内務大臣になったからである。維新元勳の生き残りは岩倉一人となり、その後ろ盾を得たのも伊藤だった。

伊藤と大隈を比較したとき、三つの点で伊藤がはっきりと有利だった。一つは維新革命での生死を懸けた志士としてのキャリアであり、二つは三回に及ぶ英米欧文明の見聞であり、三つには、岩倉使節団に加わったことで得た大久保と岩倉の信頼であった。

幕末、長州藩の討幕運動はすさまじかった。二転三転する革命運動の中で必死に生き抜いてきた伊藤と、最後まで日和見をきめこみ静観して革命の果実だけを得たような佐賀とではおのずから評価が違った。西洋知識については大隈も耳学問ながら負けてはいなかった。が、現実に旅をして見聞してきた伊藤の知識にはとても敵わなかった。そして維新の立役者、岩倉と大久保の信頼を得、後ろ盾とし得たことは大きな違いだった。

その結果がはっきりと顕在化したのが明治十四年の政変だった。憲法制定や議会政治の採用について、伊藤と大隈は二つに分かれた。そして以後、君民共治と漸進主義を掲げる伊藤がトップリーダーの座につき、日本丸の舵を握っていくことになるのだ。

そして最大の課題となった憲法の制定についても、伊藤は敢然としてヨーロッパに出か

け一年半にわたって学習する。そして法文だけでなく運用に関する行政組織のことも学び、帰国後、華族制度、皇室典範、内閣制度の創設、枢密院の設置などを着々と整え、遂に懸案だった明治憲法の制定にこぎつける。そしてその間、伊藤は初代内閣総理大臣、枢密院議長を歴任、明治国家の建設において主導的な役割を果たしていく。

明治二十二年、日本のコンスチテューションたる「憲法」が出来たとき、岩倉使節団の最重要の宿題、木戸も大久保も宿題とした課題をようやく成し遂げたといえるだろう。木戸は六年七月、帰国後直ちに「憲法制定に建言書」を提出し、大久保も征韓論騒ぎの後、十一月に「立憲政体に関する意見書」を提出している。ともに「米欧回覧」の調査結果によるものであり、いずれも共和制でもなく君主制でもない「君民共治」を意図したものであった。そして、木戸が「日本だけの」といい、大久保が「日本独自の」といい、何らかの形で日本のアイデンティティをつなぎとめようとした意図を、伊藤は天皇を機軸にすることで応えるのだ。

伊藤は枢密院の「憲法制定会議」において次のように説明している。

「そもそも欧州においては憲法政治に萌せること千年余、独り人民のこの制度に習熟せるのみならず、また宗教なるものありて、これが機軸となし深く人心に浸潤して人心ここに帰一せり。しかるに我が国にありては宗教なるもの微弱にして、一も国家の機軸たるべきものなし」

日本の仏教は衰頽に傾き、神道も宗教として力をもたない、だから「わが国にありて機軸とすべきは独り皇室あるのみ」として、天皇を憲法の核心に置いたのである。

そして「憲法」を補う形で「教育勅語」を發布し、「父母に孝に、兄弟に友に、夫婦相和し、朋友相信じ・・・」として「和魂の砦」の役目を果たさせようとした。思えばこの思想の淵源は、米国旅行中にあり、開明派の急先鋒であった伊藤に対し、保守頑固党の棟梁だった佐々木高行が反論にあるといえる。佐々木が「日記」に記した「固有の神道を基礎とし、之を助くるに孔孟の道を以て、日本独自の教法を立てるべきだ」に符合するのは極めて興味深い。

幕末以来のスローガンだった「和魂洋才」は、天皇を機軸とする「憲法」と神仏儒三教融合の「教育勅語」によって、はじめて社会に具体的な形として根をおろすことになり、日本のアイデンティティを確保しながら、如何にして西洋的近代化を推進していくかの難題に懸命に応えたものと解釈できるだろう。

* 伊藤博文の目指したもの

伊藤はその後、四次にわたって総理大臣を務め、また立憲政友会の総裁にも就任して政党政治にも先鞭をつけた。そして日清戦争では自ら全権委員として講和条約を結び、日露戦争では開戦時から腹心の金子堅太郎をアメリカに派遣して講和対策を工作した。

開国五十年を迎えた明治三十六年（1903年）、大隈重信の企画編纂した「開国五十年史」に寄稿し、憲法制定からの歳月をふり返えり、また徳川の幕藩体制下で人となり明治

の代で半生を生きた六十余年の生涯を想起して、日本の教育、日本人の理想像についてこう述べている。

「余はわが国民が幾時代、幾世紀の間、最も高等の教育及び情育を享けつつありと云うを以て、決して誇張の言にあらざるを信ず、支那、インドの全盛時代における哲学及び歴史上の実例に拠りて得たる種々の大理想は、その他各種の学芸の如くいずれも日本化され、「武士道」なる概括的名称の下に、因習の久しき幾百年を経て益々醇化し、遂に吾人に道德の偉大なる標準を供し、教育ある社会の日常生活において、厳に強行せられたり」

新渡戸稲造の「BUSHIDOU—The Soul of Japan」は、一八九九年に英語で出版されており、伊藤はそれを原文で読み（日本語訳が出るのは**）、それを踏まえてこれを書いていることがわかる。

「而してその結果は旧日本を知るものの何人も首肯する如く、スパルタの豪毅質朴なる気風及び犠牲的精神とアゼンス（アテネ・著者注）流の優美なる文化及び洗練したる知能とを兼備せんことを努め一種の教育となれるに至れり。すなわち優美なる感情と美術心とに富み、道德及び哲学の高尚なる理想を抱き、かつ忠勇義侠の精神を有するを以て士人となし、いやしくも士人たる者は、人にして悉く之を兼ねるざるべからずとなし、吾人もまた是等の学問、技芸の調和、抱有する「完全なる人物」を理想像としている。」

ここでは武士といわず士人という言葉を使っている。士大夫つまり指導者、知識人、エリート、リーダーの意味である。

「わが国民に欠くる所のものは、精神上もしくは道德上の要素にあらずして、むしろ近代文明の科学的？、技術的及び物質的方面にありしことを知るべし」

この言葉は、かつて岩倉使節団がアメリカを訪問した際に、アメリカ人から指摘された言葉を想起する。当時の日本は、精神的、道徳的に優れ、物質的、科学技術的に遅れていたのであって、今日の日本とはまさに逆であったことを肝に銘じなくてはならない。伊藤はさらにそれが武士やエリート層だけでないことに言及してこういう。

「こうした道德上の精神は士人階級だけでなく一般の平民もそれを体しており、正直勤勉にして その隣保のために、殊にその村邑のために、自家の利益を犠牲に供するを躊躇せず、温和従順にして、人生を重んじ、同胞を信じ、能く法律を遵守し、かつ優美の情操と高尚なる道德観念とを理解したりしなり」

しかし、「今太閤」と云われた伊藤もまた、かの秀吉に似て「完全なる人間」ではあり得なかった。畢生の大仕事である「大日本帝国憲法」にも欠陥があり、天皇に統帥権あるがために軍部独裁を許し、神がかりな日本をつくる一因にもなった。また、その大なる自負心は高慢にもつながり、隣国へ「文明の政治」を押しつけることにもなった。そして歴史ある朝鮮国民の心情を理解することを怠り、そのナショナリズムの高まりを軽視した。伊藤は西洋的帝国主義に準じて隣国を植民地化しその統監に就任したことは、やはり晩節を汚したというべきであろう。

そして明治四十二年（一九〇九年）、ロシアを訪問途上のハルピン駅頭で朝鮮の愛国者安重根の銃弾に斃れる。伊藤は心情的に平和主義者であり、ロシアとも協調を目ざし、朝鮮にも温情的であったといわれる。しかし、結局、山県有朋らの大陸進出論を抑える事が出来ず、侵略的帝国主義の一翼を担い、他国を支配した責任は免れない。

浩瀚なる「近世日本国民史」を書き残した徳富蘇峰は、「伊藤には余りに調子に乗りすぎる癖がある」と評したが、かつて使節が米国訪問中大歓迎されて気を良くし無謀な条約改正に取り組み大失敗したことが想起される。そして、日清の戦で勝ち、日露の戦でも予想外の勝利を得たことが、伊藤を舞い上がらせ「余りに調子にのせすぎた」のかも知れない。人間の、人事の、そして政治の難しさを痛感させる一事である。

伊藤は、最後の旅になるハルピンに向かって大磯を出るとき、海外に留学しようとしていた息子の文吉(当時東京大学の学生だった)を呼んで、次のように云っている。

「人には銘々持って生まれた天分がある。俺はおぬしに何でも俺の志を継げよと無理は云わぬ。持って生まれた天分ならば、たとえおぬしが乞食になったとて、俺は決して悲しまぬ。金持ちになったとて喜びもせぬ」

これは少しオーバーな表現だが、伊藤としては「天分にしたがって好きなようにやれ。唯、乞食になっても知らんぞ、その覚悟はしておけよ」という位の意味合いであろう。つまりは最悪の事態を覚悟して、あくまで他力に依らず自力でやれと諭しているのだ。

また、耳学問について「学問は、読む学問も必要だが、耳学問も必要じゃ。人は生きた書物じゃから、西洋に往ったら、あまねく人に接して識見を広め、いかなる人に逢うてもいかなる問題を議論するにも話のできるようになるのが肝要じゃ」といつている。

そして、その心得の要諦を「至誠」の二字にあるとしてこう結んでいる。

「俺は若いときから、心身を君に捧げ、国に尽くすことのみ心がけてきた。この胸中は光風＊清月、ただ至誠の二字あるのみじゃから、必ず鬼神を泣かせ、天地を動かして見せる。おぬしも忠義の二字の次は至誠の二字を深く心肝に銘じておくがよい」

位人臣を極めて「好運の人」と称され、時に好色を非難されながらも艶福に恵まれ、金銭に淡泊で生涯現役を貫き、大変化の時代を明るく元気いっぱい疾走した六十九年の生涯だった。それは幕末明治の大変動期が生んだ人生であり、高い志をもち、生来の資質と疲れを知らぬ勤勉努力の賜でもあった。そして伊藤が晩年になって描いたヴィジョンは、新渡戸のいう「BUSHIDOU」に内在する「日本的な文明政治」ではなかったのか、というのが私の率直な感想である。

（ 以上は、「伊藤博文の青年時代」祥伝社新書からの要約である）